

中年期におけるピンピンコロリの意識とその構造に関する検討

片浪 雄介

高齢期における生き方と死に方を表す、「ピンピンコロリ(PPK)」という言葉がある。水野・青山(1998)によると、「ピンピンコロリ」の意味は、「生きている間は元気に暮らし、寿命が尽きたときに患うことなく死ぬ」とされている。しかし、ピンピンコロリについての先行研究はほとんどなく、人々がピンピンコロリをどのように捉えているのかということやピンピンコロリの心理学的側面については先行研究では検討されていない。丹下他(2013)では、中年期以降における死に対する態度の様相を把握することは、精神的健康や生涯発達を扱う研究領域において重要とされている。よって、中年期の人々がピンピンコロリをどのように捉え、その背景にどのような要素があるのかということを検討することは心理学や老年学の領域において必要であると考えられる。よって、本研究では、中年期の人々がピンピンコロリをどのように捉えているのかということと、ピンピンコロリの実現を願う「ピンピンコロリ願望」がどのような心理的側面から生起しているかということを明らかにすることを目的とした。そのために、ピンピンコロリを「寝たきりになることなく生活し、天寿を全うすること」と定義し、中年期の男女 500 名を対象に調査をおこなった。

調査の結果、中年期の人々は、ピンピンコロリという概念を、高齢期における理想的な生き方と死に方であると捉える傾向にあり、死ぬ時期はおおむね身体の寿命が訪れたときであると捉えていたことがわかった。また、ピンピンコロリであるかどうかの基準となる寝たきり期間は、多くの人が 1 ヶ月より短いと捉えており、半年以上と捉えている人はほとんどいないということも明らかになった。さらに、共分散構造分析の結果、ピンピンコロリを達成したい人と、ピンピンコロリの達成に対して中立的な考えを持つ人でそれぞれ異なるモデルが採用された。それにより、ピンピンコロリを達成したい人は、ピンピンコロリを達成できるかどうかを確信している度合い(ピンピンコロリへの確信度)に生きがい意識が影響しているということが明らかになった。また、ピンピンコロリの達成に対して中立的な考えを持つ人は、将来に予期される介護への負担感がピンピンコロリへの確信度に影響を与えていることが明らかになった。

本研究では、中年期のみを調査対象者としたため、ピンピンコロリを達成したいか、どちらでもないかによって異なるモデルが中年期特有の特徴であるのかが明らかにならなかった。よって、今後の研究においては、中年期だけではなく、青年期や高齢期の人を対象に調査をおこない、ピンピンコロリ願望の構造を検討することが望まれる。(臨床死生学・老年行動学)